結婚したゲイ男性から見える光景

小　高　良　友

[1] はじめに

ゲイスタディーズの領域では、伏見憲明や河口和也などによる記念碑的作品がいくつもある。そこに入り込む余地があるとしたら、結婚したゲイとして発言していくことだとかねてから私は思ってきた。その思いに立って書いたもの[1]もあるが、今回はその思いを共通基盤としていつくかのテーマのもとに小考察を書いてみたい。以下のそれぞれの節は、考察としてはそれぞれ独立しており、本稿全体として論理的な流れがあるわけではない。それらの節にあるつながり、それは、結婚したゲイから見える光景のいくつか、ということになる。

[2]『ずっとあなたが好きだった』再考

平成３年に私が結婚した当初、いわゆる「連ドラ」(テレビの連続ドラマ)のひとつとして『ずっとあなたが好きだった』が放映されており、当時の連ドラのなかでは抜きんでたヒット作となっていた。マザコン「冬彦さん」と言えば思い出せる方が多いのではないだろうか。私がこの作品に気を引かれたのは、ドラマがスタートした間もない頃に、「冬彦さんが奥さんに手を出さない、寝ようとしない」という場面を見てからだ。ひょっとしたら冬彦さんも「お仲間」なのか、と思った次第である。

この作品のあらすじを紹介しておこう。本節での考察との関連上、以下はやや詳細な紹介となる。

主人公の美和は29歳で仙台生まれ、父親からの見合いの勧めに屈して冬彦と見合い結婚してしまう。冬彦は東大出のエリート銀行マンで一人っ子。銀行マンだった父親は既に他界し、冬彦は母親の言うままに勉強ばかりをしてきて、友達もいない様子。昆虫標本集めとファミコンが彼の唯一の趣味。結婚初夜はもちろん、しばらくしても冬彦は美和を抱こうとしない。不審に思った美和はそのことを親友に相談し、親友に訪問してもらって、冬彦に暗にセックスを促す。その晩、冬彦はそのことに逆上し、「君が淫乱だとは知らなかった」と美和をののしり、美和を抱こうとしないのは「僕の言うとおりの妻にまだなっていないからだ」と言ってしまう。ドラマが展開するとわかってくるのだが、冬彦が結婚してから何日も美和を抱けなかったのは、セックスの経験がないためにやり方がわからず、自信がなかったからだけだったようだ。

「君が淫乱だとは知らなかった」という言葉にショックを受けて、美和は翌日里帰りをする。それ以前から美和の新居の近所に昔の恋人である大岩洋介が住んでいることは偶然にわかっていたが、美和の里帰りのときに、ラガーマンである洋介も出身高校のラグビー部のコーチで仙台に戻ってきており、そこで美和は洋介と再会し、結婚を後悔しだしていることを洋介に感じさせる。元々ふたりが別れることになったのは、高校三年の七夕の夜にふたりが外泊し、それを知った思いこみの激しい女の子がそのことにショックを受けて自殺してしまったことによっていた。その事件が起きて、美和の父親は２人の交際を無理やり絶ち切った。思いを断ち切れなかった洋介は、東京の大学に進学してからも何度も美和に手紙を出していたが、その手紙は美和の元には届いていなかった。美和の父親がじゃまをしていたわけだ。そのことをふたりは仙台でのその夜に知ることになる。それ以前にも、結婚後、美和は洋介の招待により洋介が勤める会社のラグビー部の試合をひとりで見に行っているが、美和が高校生のときに作って洋介にプレゼントしたラグビーチームのお守りマスコット人形を洋介がまだ大事に持っていることをそのときに知って喜ぶ。

その試合のときも、里帰りの仙台の夜のときも、冬彦は美和が心配でこっそり後をつけていた。美和が仙台から帰った夜、冬彦は美和が入浴している間に美和が仙台から持ち帰ったスクラップブックを燃やしてしまう。そのスクラップブックには学生ラグビー界のスター選手であった洋介の記事が詰まっていた。そのことに耐えられず、美和は家を飛び出し、一人住まいを始め、離婚を考えるようになる。

美和の父親は、冬彦の父親の口添えで銀行から商

売上の融資を受けており、その関係で美和との縁談も受け容れていたこともあり、美和の離婚に大反対をする。

一人住まいを始め、仕事も始めた美和に冬彦の母親はさまざまな妨害工作をして何としても美和の離婚を阻止しようとする。その間、冬彦は仕事で大失敗をして会社に多額の損害を与えてしまう。そのことの責任をとって母親に内緒で冬彦は銀行を退職し、美和に再度やり直すことを提案する。銀行も自ら退職し、今後は母親の言いなりにならないという冬彦の思いに心を動かされた美和は、再び冬彦との新居に戻って冬彦との生活をやり直すことを決意する。そして、その晩にふたりは初めて結ばれる。

ところが、その後のセックスのさいに、冬彦のリードに美和がわずかの注文をつけると、冬彦はそのことを不快に思って美和を拒否してしまう。冬彦はエリートスポーツマンである洋介にセックスの上でもコンプレックスを持っていたのだ。その間、冬彦は新しい職場の部下のはからいでサドマゾクラブに出入りするようになり、そこでの道具を購入して、美和にサドマゾセックスをもちかける。そのことに耐えられなくなった美和だが、自分が妊娠していることに気づく。

冬彦の元に戻ってもいっこうに幸せそうにならない美和に洋介は耐えられなくなり、決まりかけていた自分の結婚話も破棄にして、美和を取り戻そうと決心する。その姿を見てしまった冬彦は、美和の妊娠を知ってもその子どもが自分の子どもとは思えず、洋介の子だろうと美和に言ってしまう。そのことが決定的となり、美和は再び冬彦との新居を出て洋介のもとへ行く。

その後も冬彦の母親の策略で美和は一度冬彦のもとに戻るが、最後は、冬彦が母親を刺して傷害行為で自首をし、冬彦の母親も２人の結婚の継続をあきらめ、美和の父親もそのことを受け容れ、美和と洋介は結ばれることになる。

最終シーン。洋介にたいする「ずっとずっとあなたが好きだった」という美和のセリフでドラマは終わる。

このドラマが放映されていた当時の私は、妻との結婚生活が安定せず、毎日情緒不安定で苦しんでいた。そんな私の気分と冬彦の気分とが重なって、このドラマに私は親近感を持ったようだ。第２話からこのドラマを毎週見るようになり、最後までもちろん見続けた。その後は、ダイジェスト版も放映されたり、ビデオが出版されたりで、放映が終わってからもこのドラマを何回も見続けた。自分の結婚が間違っていたのではないか、結婚はやはり本当に好きな人とすべきではないのか、とあの当時は深刻に思い続けていた時期でもあったため、冬彦の妻の美和の思いや行動に私は強く共感していた次第である。その当時の私の葛藤やそれを乗り越えていく過程については、別稿[2]があるため繰り返さない。

しかし、あれから何年か経過し、私の結婚生活も既に17周年を経過してみると、だんだん冬彦さんに同情的になってこの作品を見ている自分に気づくようになった。

「ずっと好きだった人と結ばれたほうが幸せ」、そんな暗黙のメッセージがあの作品から流れてくるが、本当にそうだろうか、と私は思うようになってきた。「ずっと好きだった人」と結ばれることに私は反対しているわけではない。しかし、「ずっと好きだった」その人と結ばれなかったとしても、別の人と結ばれたのであれば、その人と別の人生を歩む道ももっと残されているのではないか。

後の連ドラのなかに、『僕と彼女と彼女の生きる道』という作品があった。主人公の草なぎ剛と小雪との会話の一こまに、私には非常に説得力のある印象的なセリフがあった。「どの道を選ぶかよりも、選んだ道でどう生きるかのほうが重要なんじゃないか」という小雪のセリフがそれである。

結婚前に妻の実家に挨拶に行ったときに、妻の父親から私はひとつ注文をつけられた。自分の娘との結婚にあたって、忘れてほしくないことがひとつある、と義父は言った。どんなひとにも長所がある。相手の短所ばかりが見えてきたときには、ぜひそのことを思い出してほしい。互いに許し合うことが夫婦生活を長続きさせるうえでとても大切だ。そのようなことを義父は私に遺言のように語ってくださった。そのときはそんなものかとお話を伺っていたが、その言葉の重さにやがて私はだんだんと気づくようになった。夫婦同士で「許し合う」ことは「選んだ道でどう生きるか」を実践することにつながる。

別稿[2]でも書いたように、私の結婚生活には今まで何回か離婚の危機があった。そのときは、相手の欠点が何百倍にも思え、もう結婚生活は続けられない、などと思い詰めてしまう。しかし、その時が過ぎてしまえば、結構つまらないことで喧嘩したことに気づくことがほとんどだった。離婚の危機でも離婚せずに踏みとどまった要因にはその時々でいろいろあるが、ひと

つ大きかったのは「子どもの存在」だろう。それが、「許し合う」ことを最大限可能にしてくれた。

ゲイ同士のつきあいでは、養子でももらわぬかぎり、子どもはいない。通常は親類縁者を呼んで結婚式などしないゆえ、そのような回りへの配慮も不要だ。その分、当然ゲイ同士の関係はもろくなる。いわば「許し合う」限度がおそらく通常の夫婦ほどは大きくないのだろう。その分、「もっと好きなひと」が出てくれば、また、「ずっと好きだった人」が出てくれば、そちらのほうに心が移りやすくなる。

美和は冬彦にとっては「ずっと好きだった」あなただった。それが最終回で冬彦の口から語られる。

美和が自分を変える努力もするなかで許し合うことがもっとできたなら、冬彦との関係ももっと続けられたのかもしれない。

[3] 結婚の規範化

別稿[2]で「愛情の規範化」にからめてゲイの結婚について論じたことがある。愛情を持つことがプラスの価値を付与され、それが規範のようになり、愛情が欠如していると思っている当人を苦しめることがある。それが「愛情の規範化」の要点と思われる。この概念は岡原正幸によって論じられ、私の場合、自分の結婚生活の離婚の危機を乗り越えるさいにとても役だった経験があった。

この概念と関連させて、「結婚の規範化」について論じてみたい。年頃になると結婚するのが当たり前のように思われ、結婚していないことが恥ずかしいことであるかのように思われることは、よくあることだ。私はそのことをさして「結婚の規範化」と呼ぼうとしているが、本節で「結婚の規範化」に着目したいのはそのこと自体ではない。それはそのように呼ぼうが呼ぶまいが、一般にはよく見聞きされていることだからだ。私が「結婚の規範化」に着目したいのは、それによる私にとっての「効果」のほうだ。

私が「愛情の規範化」で自分の結婚生活を論じた報告を研究会で報告したさいに、古川誠から有益な意見をいただいた。「愛情の規範化」は私にとってプラスに働く側面もあるはずだ、と。そのときに古川の意見を掘り下げてお聞きしなかったため、古川の真意をゆがめている可能性はあるが、古川の思いを再現してみたい。

ゲイ同士のつき合いも「愛情」による結びつきがあれば「愛情の規範化」によって社会的に受容される側面がある、そのように古川は言いたかったのだと思う。それは私も体験的に実感することはある。ただ、私にとっては、そのような「愛情の規範化」による「効果」よりも、「結婚の規範化」による「効果」のほうが大きいような気がしている。私が思っている「結婚の規範化」による「効果」とは、「結婚」しているとゲイも一定程度寛容的に世間から見られる土壌ができる、といったことをさしている。

例を出そう。私がゲイであることをカミングアウト(告白)しても、結婚後のカミングアウトと結婚前でのカミングアウトとでは、世間の風当たりが微妙に異なるような気がしている。結婚して子どももいる私がゲイであるとカミングアウトしても、結婚しているし、しかも子どもがいるのであるから、冗談かもしれない、両刃使いなのか、とみなされ、ゲイであることをある程度許容されているような気がしてならない。典型的なのは、私の兄たちの反応だ。私がゲイについての研究者になりたい、と約32年前に切り出したときの兄たちの反応はすさまじいものだった。そして約15年後。私が結婚の報告をしたときである。「お前も改心したんだな」との一言。私は「改心」などしていない。何も変わっていない。子どもが産まれてからの兄たちはさらに「安心」している。

信仰の同志たちにゲイであることをカミングアウトしたときも、私は結婚して家庭を持っていることが彼らの反応に大きな影響を与えたように思われる。信仰の同志たちは、意味がよくわかっていないのかもしれないが、私のカミングアウトにたいして予想ほど厳しい反応はしなかった。

これらは今のところ、私にとって「結婚の規範化」による「効果」となっている。これは結果的に「効果」であることに気づいたのであり、私はそれがほしくて結婚したわけではない。

ゲイにかんする諸文献でも繰り返し言及されているように、同性愛と一言にいっても、同性にたいする性愛志向の強さは人により様々だ。同性愛者が異性に性愛を全く感じないとは限らず、その志向の強さも様々だ。世間一般では、同性愛者は異性に性愛志向を全く持っていないと思われがちなため、結婚して子どもがいる場合は、子どもがいるのであるから「ゲイ」であると本人が言ってもそれは何かの間違いなのかもしれない、と「錯覚」されてしまうのであろう。

[4] 信仰という絆

私と妻は創価学会という宗教団体の同志である。私は創価学会に入会していなかったら結婚はしていなかったと思われる。信仰生活をしていくうえで結婚している人の気持ちを理解することはとても重要なことになると思い、私は結婚を決意した。

このような結婚はもちろん一般的ではない。それゆえ、何度も離婚の危機があったわけだが、それを乗り越えるときの大きな原動力のひとつとなっているのが、私と妻との間にある「信仰という絆」である。

私にとって結婚を維持させている要因は、「子どもの存在」そして「信仰という絆」である。妻はかけがえのない信仰の同志である。

約17年間の結婚生活のなかで迎えた何回かの離婚の危機を乗り越えたさいに、かつて述べた[2]ように、「愛情の規範化」という考え方は体験的にひじょうに役立った。これは私も妻も同様であった。それ以外に「信仰という絆」がどのように役立ったのかの例をあげてみよう。

まず忘れられないのが、二人の結婚のご報告を創価学会池田名誉会長にしたときのことである。お祝いに私たちは名誉会長からお数珠セットをいただいた。これはどういう意味なのであろうか。妻も私も二人でしばし考え込んでしまった。おそらく名誉会長は、私たち二人が何度も離婚の危機を迎えることを見通されていたのであろう。そのときの要点となるのがおそらく信仰の絆であることを、既に名誉会長は見通されていたのであろうと思えてならない。それも今となってはの話であるが。

事実、私は「危機」のときに、名誉会長からいただいたお数珠を取り出して、「離婚」について祈り、考えた。そのときに、妻がどのように対処したのかはわからないが、おそらく妻も、私と別々にではあるが、同じような行動をとったのではあるまいか。

他に体験的に役立っているのは、この信仰が持っている発想のひとつである。それは、相手を変えるにはまず自分が変わらなければならない、という発想だ。これはもめ事の責任がどこにあるのか、という原因論とも関わっている。妻の行動が許せないと思ったとき、妻を責めているばかりでは事態は解決していかない。妻がそのような行動にでるのは私にそうさせるような原因があるのではないか、と自省することにより、妻を責める私の姿勢に変化が現れる。「祈る」ことによってそのような思いが生まれてくる。もちろんそれはたやすいわけではないが、祈りなくして自省だけしていても効果は薄い。

私が上記のような発想を行動に移すさいに、これまで社会学を勉強してきたこと、なかでも逸脱行動論、とりわけ「ラベリング論」に執着してきたことが役立っている。社会学はもともと、逸脱行動が起きたときに、その行為者が「逸脱」していると見るよりも、その行為者にそのようにさせるような状況があったのではないか、という側面、とくに相互作用面にとりわけ着目する。とくにラベリング論はそのような発想を持っている。これは私にとっては、夫婦喧嘩を切り抜けるときに大いに役立っている。

「信仰という絆」は離婚の危機のときだけに役立つわけではない。私にとっては、離婚の危機がないときでも、結婚生活を維持していくうえで役立っている。

学部学生時代に寿司屋の出前のアルバイトを何年かしていた。そのとき店主からお聞きした話のなかに「夫婦生活の良さ」があった。人生の難問にあたったときにそれを乗り越える同伴者がいること、これはとてもいいことだ。それはそんな趣旨のお話だった。それをお聞きしたときはさほど印象的ではなかったが、今ではそれに共感できる自分がいる。

もう少し補足しておこう。困難に遭遇したとき、これまで私なりに対処し、そのさいに信仰が大いに役立つのであるが、妻は私とは違った対処をすることがあり、それが私のカラを破ることにつながった。それに何よりも、二人分の祈りがあると困難に対処する力は倍以上引き出されるのだ。

[5] 宿命の嵐－「家族を守る」

ようやく「同性愛の研究」に専念できる環境づくりができてきたにもかかわらず、私の「同性愛研究」はさして進んでいない。その原因は、大学での通常の仕事（教育と学内行政）が忙しすぎるということももちろんあるのだが、「生きていくのに必死」「経済的に生きていくのに必死」という悩みがあり、同性愛のことを考える余裕がない、というところだろうか。

大学院生時代、当時の日本育英会からの奨学金のみを頼りに生活していた私は、勉強の時間を確保することを最優先にした生活をしており、アルバイトは全くといっていいほど入れずに大学院生時代を送っていた。それでも研究者になる卵として、本を買うお金は何とか確保しなければならず、食費は最小限に切り詰めなければ生活していけなかった。それでも本代にさ

けるお金などびびたるもので、次第にクレジットカードで本を買うようになった。これが重なり、10年間続いた院生生活とその後の２年間の助手時代を終え、現在の勤務校に赴任して２年目に結婚したときにも私はこの借金を引きずっていた。それは決して小さなものではなかったため、もちろん妻に正直に話して了承(？)をもらい、何とか二人の結婚生活は船出したが、これは現在にいたるまで、我が家を苦しめることになった。途中何回か「もう生活していけない」という場面があったが、信仰の絆で結ばれた二人で祈りに祈り、何とか解決策を見出して18年間をしのいできた。

日本では「ゲイであること」だけではゲイは法律的に処罰されることはない。それでも「ゲイであること」で生活しずらいことはたくさんあり、それに研究者として立ち向かいたいと思い、現在の職業を選んだ私ではあるが、経済苦の宿命と闘ってみると、「ゲイであることで悩めること」は経済的に保証された生活の基盤の上に成り立つことのように思えるようになった。私が学部生時代、同性愛の研究をしていこうかどうか悩んでいた時期に、私の父は私たち家族を守るために必死の格闘をしていた。不況のなかでも家を建て直し、それからやってくるその返済のために父は必死になっていた。新しく作ってもらった私の部屋にもあまりうれしい様子を見せない私に父が言ったことばを今でも私は鮮明に覚えている。「ちっともうれしそうじゃないな。張り合いがないな」。そのときの私は、「新しい部屋」よりも「ゲイという自分を見つめて自分がどう生きていくのか」のほうが今の私にとっては大事なことなのだと心の中で父に言い返していた。

しかし、もちろん今でもそれはそうだったのだが、そういう悩みは父によって「経済的に守られて」いたからこそ悩むことができた悩みだったことに気づく。

ゲイである前に一人の人間として家族を守って生きて行かねばならない。

結婚していなかったならば、そのことに私は気づけなかったかもしれない。

［註］

１．①小高良友「ゲイ・カミングアウトの社会学をめざして－自分の事例をてがかりに」,『東海女子大学紀要』24号，2005，59-69頁。
②小高良友「『ゲイの結婚』について考える」,『東海女子大学紀要』22号，2003，45-49 頁。
③小高良友「ゲイ男性の「乱交志向」について考える」,『東海学院大学紀要』１号，2008，51-56頁。

２．前掲、小高良友、2003。